

巻頭言

ばれいしょ原原種生産に携わって40年

(独)種苗管理センター 理事・十勝農場長 田島 和幸

昭和48年5月、北海道帯広市の郊外の幸福駅に降り立った。目的地である農林省十勝馬鈴薯原原種農場までは4 km以上の道程があり、トコトコと歩いて農場事務所までたどり着いたことを思い出す。

実家が畑作農家で、ばれいしょ栽培も行っていたが、ばれいしょに種いもの増殖体系（原原種→原種→採種→一般栽培）があることも知らず、ここでの業務は全く未知な世界であった。先輩から、農場は「清薯源流」の地であり、種いもの頂点にある健全無病な原原種を安定的に供給する使命があると厳しく教育を受け、先ずはばれいしょの病害虫を学ぶことから始めた。

職場では、検定の基本となる病株抜取りをたたき込まれ、抜き残しなどがあれば、解るまで同じ畦を何往復もさせられた。

当時の病害検定には、現在のような遺伝子診断などの科学的な技術が導入されておらず、ウイルス病などはタバコやセンニチコウなどのウイルス病の反応が見やすいテストプラントを用いて接種検定を行うことが主流であった。このテストプラントの栽培も新人職員の担当であったことから、毎日温室に出向き生育状況を確認するなど、これが後の各種技術習得に大いに役立っていた。更に、当時はまだ珍しかった電子顕微鏡が十勝農場に配置されており、初め

てウイルス病の粒子を発見した時の感動を今も鮮明に思い出す。当時、血清検定はあったが、スライド凝集法によりウイルス病を判定するもので、抗血清の力価によって判定に苦慮するなど精度は高いものではなかった。その後、ラテックス法やELISA法が開発され検定精度も大幅に向上し、センターも速やかにこの技術を導入することとなり、現在のPCR等の遺伝子診断まで技術が進歩している。

ばれいしょの原原種は、私が入省したときは、8つの原原種農場で12万袋（20kg）を生産配布していたが、現在は本州地域の生産の減少が進み、6.5万袋の配布となっている。一方、ばれいしょの品種は、青果用の「男爵薯」、「メイクイン」、加工用の「トヨシロ」、でん粉原料用の「コナフブキ」が長い間主要品種でしたが、これらの品種は病害虫に弱いなどの課題があったことから、育種も強化され、ジャガイモシストセンチュウやウイルス病抵抗性品種の開発が進められ、現在は80品種を超える品種をセンターで扱っている。今後、当センターとしてもばれいしょ産業全体の発展に寄与するため、健全無病な種苗を安定的に供給する使命を引き続き果たしていきたいと考えている。